



A vertical ruler scale from 0 to 6 inches. The numbers are black, except for '20' which is red. The word 'JAPAN' is printed vertically in red at the top, and 'Tajima' is printed vertically in red at the bottom.

七
九
九
九
九
九
九
九
九
九

A decorative floral border at the top of page 11, featuring stylized flowers and leaves.

卷之三

६४

卷之三

門人利5
2/16
卷

自句
句作
筆數
雜於

舊句自句並列
讀名句句
文章

抱毫花

舊門派諸源流下

藤野潔氏遺愛之記

明治四十一年四月廿四日

圓印

藤野漸氏寄贈

附句乃至

義理發來之處也
三處有之者之所有とぞとて中間を有すとりつゝと
古今の如きを以ての往來と以ての往來と
所は本倒立とて一端とて小切ひしや
西風うかがひて御ゆきとての

下

欲知後事如何，請看下回分解。

まことに、おもてのうへんをすこしもあわせぬで、
かくは、おもてのうへんをすこしもあわせぬで、

景和以之和之于
之象比形人事仲末

多歎の遊焉より其形容となつてゐる

卷之三

之子也。其一曰子房，而子房之子曰留侯。留侯者，沛人也。生四岁而孤，大父、父皆亡，相与百里侯、留侯皆以之爲子。留侯有五世祖，皆名張良。其二曰良，其三曰噲，其四曰噲，其五曰噲。良者，字子房，齊東武里人也。子房生於齊，五世祖良者，齊人也。良者，少好學，年二十八，始受《禮記》、《春秋》。學成，去其家南遊，至留，見張良，與語甚歡，因留。良謂留人曰：「吾欲居此，子何不與我俱？」留人曰：「君若欲居此，則請君取水，吾亦請君取水。」良曰：「君取水，吾亦取水。」良自取水，水出於後，良知之，乃急走，因留。留人曰：「子房，奇士也！」良問其故，留人曰：「子房知吾水出於後，急走，故得先取水。」良大喜，遂留。良者，姓張氏，名良，字子房。良者，少時好學，年二十八，始受《禮記》、《春秋》，學成，去其家南遊。至留，見張良，與語甚歡，因留。良謂留人曰：「吾欲居此，子何不與我俱？」留人曰：「君若欲居此，則請君取水，吾亦請君取水。」良曰：「君取水，吾亦取水。」良自取水，水出於後，良知之，乃急走，因留。留人曰：「子房，奇士也！」良問其故，留人曰：「子房知吾水出於後，急走，故得先取水。」良大喜，遂留。

其爾因方之多之也
尾也

宋了了油搗少
水東流

うかへくまか漸遊の服とせり

ふくらむる立とて白

而東の中によがのふ

とすれどかと心のまこととおもふと自慢や

タチ小猿義の神仙トふくらむる立とて云

白

うれせれとあきよ小町なま

と云ぬの句すれけうれしや一作の印とも云

てゆくれ事不一か當時のうれし所アリ

翁の衰病トモホー達東ふうかふ無津不謐ち
ヒトシノ身とてうらやう血氣トモホの身とて向う
レシテアラモテ行ひぬこれは癡いうふ念トモホ
利体の葉の湯トモホの身とぬじまわづれ西
タとよもかアーラジカアーラノツクアーラ
利体アラ不興トモ新古れ日利トモ高ヘアシカ
ミとぬじまカアーラノツクアーラナカレ塔トモホ
ノツクアーラノツクアーラナカレ塔トモホ
ノツクアーラノツクアーラナカレ塔トモホ

トトロの事はあらゆる高人の諭教とれ然な
事でかく序がキリツイに思はれども是ハ乃ち主とく
強てからく内利をもつてゐるやうな事もあらず
誠のじつうにふく序の事アリ特小字跡にて
風林煙刻古文書の事とて是用あり甲子
正月よりもあまねくうづくつては一めぐ
一書よやく句たりする事とて二句好句あるは
珍りと多き事十日すと却て石井水をうむ

崖高附句は變化をもむる料記の事からて破く
うるゝやへん死するといひあへばよりて
時不同くすと變化とつてす

連やれむりしと自命其道とたゞすいと
の無人トムシテ於の行へり難とせぬなり
其高附もむじうへ附あは景也或と解ますて附す
竹と今ハナあらずすり草と草をれ和モ一句
の意解されぬとてけむる蓋の事とあらう方情を行
事と筆すとあらそいとすり傍見へうるうとせぬ

葉と枝を被るゝあつたとほきとてす
附あるもあはれどもすくらぬまことの
筆すゝへりハ行とのてうづけしや
附角をうねがへりあらぬわねるり向むち
白いふるふるさうりに拵あり

附の白事に附の白事とすと
とすとすとすとすとすとすとすと
附の白事に附の白事とすとすとすとすと
すとすとすとすとすとすとすとすとすと

白骨

先師の骨を手本のぶよとく器画人下付役一
代りとすくう筆とすとすとすとすとすと
すとすとすとすとすとすとすとすとすと
すとすとすとすとすとすとすとすとすと
すとすとすとすとすとすとすとすとすと
すとすとすとすとすとすとすとすとすと
すとすとすとすとすとすとすとすとすと

下五

是と云ふ事は大和の事一耳すれど文を組
へる事よりは不思議な事である直にか
然とハシメ文と云ふ事かと云ふ事
を一を取つてゐる事の方にあつては
御と同音時亨が承認する事で
之と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
ちの事と云ふ事二つある事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

萬物皆有裂隙，那是因為它們是爲光明而生的。

支那墨の人仰鶴よお紙とくらむに附方丈堂也と
いふ事をかひて御書もこの事によやくはといふ
か紙をうそくす。うそく所の方あるあらうと見てらしく
の筆化をかかの筆をうそくの字一筆と書くとく
がまともかかへば前とこうの事一筆と書くとく

政治の運営をめぐる問題は、必ず政治家が議論する事である。政治家は、必ず議論する事である。

下
文

う
かく石高は豈へるをうりと
ゆきも事れあ
とつづくわゆと人のことの
う事すまともひやうといふ事すまともひ

跡もアラホド之甚堪能モノ其事節ナシル也後未
又多モトハタマニテナホカヤムキアリテ年少先と年
て高弟の多キシホクモホニ故ナシル修業化ミトヤマリガ
支那ウニヨーロピスヨリ所ノ佛の本もクニヘ
切カモカハキムカモナリケリ如ニ一切経肉も禁つと
あ

故にあらわすと必ずとて
松葉あらわすとて
老ふるあらわす
やまぐみの像の頬がとて

トテマタカシキトテカナリシモトヤハシヒタガルニ不
アシナガリスルニシテトヨタカシキトマヌケシキシモ
トシタヘヨリトモ先序トヤマシテ

名義の「まこと」始終の変遷と「アシナガリ」と
「ヨリ」が「シタヘヨリ」の意味か「アシナガリ」と
「トシタヘヨリ」の「トシタヘヨリ」を「アシナガリ」と
「トシタヘヨリ」の「トシタヘヨリ」と書く

費句と附るは互引の本

翁曰筆句と之細の如才三字句と有り其の位
に筆句と應つて之筆句と之細と云ふ
又翁曰費句とはもと筆句を筆句とあひたうめい
色一

無神と廟ノツツニサニ耶

信徳

是も筆句とあるが其の筆句と有り其の筆句の
意真もと筆句と有り其の筆句と有り其の筆句

卷之三

川や河の水

毫端

先づ水を引くは必ずゆきとて、うすに傳あらざるを
不思議のせりゆくとて、舟と車とて、

山里の風景は、あのうねり

とくに顎あごの黒い方から生えて来るので
喉のどもそのやくおひそかゆゑを公費から負ふる事
年々の如きは年々の如きは年々の如きは年々の如き

許と四辻をのまへ葉の音す
シテ板ノ一匁づくもあくま年々通す
道ノ一切ノ事あきらニテ
内ノ網ノ目とよきせ
此之の事の向

かくもあらわす事
れどもあらわす事
風の波と手のやうと手のやう

向以北事

下九

萬葉の歌を、かの吉と
名乗ひて、洞の作ぬへうす
久セハシテ、のつゝ、
まくわあくと
神様もまた復活す
一曲あると云ふ事
わざあ、と云ふ事
あ、他の事もあ

久き都事とえりや
丸木丸板磚小饅肉とを
く寧ちうづらひまくそくしゆもととゆの身をさば
原木を砧少すとまづりあく身縫ひあ
ぬれするもとを抑ひ小面
おく繕ふあやむとせう

いはくのが、まもととおとおとおの事たる
うへよめきく人を愛とせぬゆきのゆゑに
のむきのうひのうひのうひのうひのうひのう
トモヒテヨリ

日はまくらのふれりのやう、承

東角

は又文をもつて、そのもの口うえにとすを能く
ゆきまづ従ふ。其角うな根うり、も特く元や、う
まくや。今是とあつてあや。

考風

半
子

経験の連続性をかくのから、うなづきと似てあります。

蘇緯の東京都立図書館の蔵

元の木もひまかわらへ
ひまかわらへと春の花と
ひまかわらへと秋の葉と
ひまかわらへと冬の雪と
ひまかわらへと春の花と

一尾根の二の山

アリス園
アリスとアリス時
アリスのアリスセイ
アリスアリスアリス
アリスアリスアリス

往と一ノノ事と

久々ニアリハトモア事ハヤシト一人ニノ小う事
ア事ハアノトアノトアノトアノトアノトアノトア

其角四マタリ端のメニミテアシカシ小仰リ一
えれ西リトノ骨アヘンと仰リテ聲半ミコソウル事
とアヤシ小アハヤリトヤマツルクアサヒサセキサ
又の聲のわきアシカシム魯の法比碑ノ仰リテセキサ
シキノアノニアイウエラトモアホアヒアモアヒア

アシカシナリトモア漸滑ア毫のアノトア
トモア我並行肺のアノトア經變誠アノトア山中アノト
猿アノ小裏と音セキア漸滑ア經と入事アヒシレキ
忽崩腸アヨヒト仲ヒキアムニ懼アシ幻術ニ
アノトアヒキアシカシアノトアヒキアシカシ
斐アノアノトアヒキアシカシアノトアヒキアシカシ
痴小石とアシカシアシテ経音セキアノトアヒキアシカシ
アシカシアシカシアシカシアシカシアシカシアシカシ

名とまうりゆきと
わからぬめとえど
夜ふかせとくとく有
神あらわすまつまつ
みといとくとく

大清康熙七十二年

乙
12

まことにまことにまことにまことにまに
江法同く支とひふとひすい古風のまことま
水のまことまことまことまことまことま
れども清下のまことまことまことまことま
風とくのまことまことまことまことまこと
風とくのまことまことまことまことまこと
風とくのまことまことまことまことまこと
風とくのまことまことまことまことまこと
風とくのまことまことまことまことまこと
又もうとくのまことまことまことまことま
破とくのまことまことまことまことまこと
浮とくのまことまことまことまことまこと

時の事小まことと越後とおどりの事と小葉と下まくせ
を含むとまゆい竹下と金毛せ黒ト一色とまくせはと
おりよひと元やかに車より金銀と新うるを車と
りくふのをとむらむるえあが

今同門の事先師乃夏風とまくせとアドリ先師乃
梅つ小の日本と此れがとくやー経てと成らんと
さうやうのと師の角の波がめ御ある一のと
ありの人のとととととととととととととととととと
むとととととととととととととととととととととととと
むとととととととととととととととととととととととと

とととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと

とととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと

まよへてこひすくはるかにあはれ我へむあ
うや

おまのん漸済をめつ、うきるくらはるかにあ
あくねきうながと、いとまうじのぬとくかふふ
者するうとづらう教へ、さあうれ賛あらまわ
宣傳がれあも深きたまよと縫うるあもとまき
すととくちづく、それああうもとく深方傳あらと
こどものーおだりくらぬくす経く

毛毛のわざと風流の大才とくわまく、うきる

まよへむとくの唐ふねの筆者よりふきむへはうと海
うきるくら我をかみの筆者ひきとくへはだ
あきが向とひととせや是と都小狂うと、いとくも
じうり又あるくむじますへうと、いとくも又
は年の人向とひきとくへはだとくらむ却るやう
よといそとつ物の筆者ひきとくへはだと容易
送へうと却てうれゆはまく因と新事へうと
うとへ是と所のとくへ

おまのん漸済の因と新事へうと不思

先師の御教を承りて
向ふはいとまことに御心をもて
あくまでおのづかの如きをよわ

多忙の事で原稿を書くのが
なかなか出来ないが

路通

先席のえこひの廻り

十國より小粒するか秋の風

序六

先席四句句とあらま

久松佐

即の先れとくらむまつて廻の門 去ま
先席四句の後事節ありまととや四三句後
事事あるまつてや三句の句とまつてもや變
う後を換のちあくまつて半不押合とづれ或と
あくまつて或とわらうあまう費うまつて

位下水

身より身とつてあわうが歌消るもめ成り遠年
歌もとくも身からうとく歌消のつふ歌消のう歌
なまくい歌消のう歌す一曲の昔の門の後後後年歌
と歌の事とつてうき歌消と一曲の歌消がくらま
う歌消と身と

河口ふうとくわうとくわう

身と身と先席序しての後文歌と身と身と身と
身と身と身と身と身と身と身と身と身と身と

往る先節曰あゝあやうすとおなへや後をと
スを旅の本いなせまといと又ぢうち旅の本と
いはておまかし、おまかしの宿の酒をひくやうの本とて
旅者へおまかし、おまかしの宿とあるとつらをま
はくまく壁とおどり、うなづくやくもがみ
あうれむ

うよ波とつゆあま婆とくちきぬうとせの風ふる
あまやと母波とくちきぬ川すま
まきよ絆よせ

先序洋一と田代つまうとおまと
まく

あこよーれとゆよ

とつまーう娘かーとまつーかーとやう娘
おまく酒の佐よやーとゆゆかーとゆゆかーとゆゆかー
車ー娘やーう津川又おー支考とおとゆゆかー
向中小便とおーとゆくハ柳糸の風ーゆゆかー
ゆゆかー

唐那うる根ー玄のわく絆ふ

卷之三

之燭子

秋の序
好之也
此月

卷之三

アラマサトハセトヨヒタニヤシテヨリ
カニシキシテヨリ

卷之三

其角

其角りて之御事よりは丸堂之御事より
と達りたる也。初の事もいづれも
かくかく事丸堂にかどりて是不思議なる所也。おうそれ
くわうて御事成る所とぞ時又事つて
へん御事成る所とぞ其角りて之御事より

素行うららか者よ所へかまくらの前尾お舞まで
凡あと化すよお世をきへるまく待てばあまよ
新しにわく一毫と奪はむくもの半小うれず禪と集
らへゆ一音どり故に是をもきそへるまくまへて
其角うかうまく情へゆく過らう初まくは惜へ
生能きつぐよもへ経すうたまふうもとく事わう
もくハヤふホー経すハラくされ急を入るまくよ
ヨリとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
允能くと費う儀八十支まく一宇に跡よまくう

酒薄かとさうて和音の一絃へんかふへゆきれ松
作まへとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あくわくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

岩流や空よといとう月乃空

去来

酒薄ハげうと月の様とや あれと弓とやあやまうる
まくとえと席田猿とハ行幸を地とれうといふ云
て仰きうや弓田の事とや あ山をとひお
やうよ一人の路方とくとくとくとや生師田まうひ
もう月の空と石を都へりとおもくれゆふ

卷之三

久留米の事は、
おもに、
久留米の事は、
おもに、

之而世よ漸済も之会もつて七日を終りて
わざう一色草の花を之の漸済も之時
を薦乃津ゆめくや生大根

三才圖會一書之總序乃一家之源流之後

おもへぬ事の如くや三歳未よあつたもの
をうへてから猿小鳴へて奉入
せばやうされど御所の馬とて何がうるを
うるとまうせやひとまゆの端葉
やあれどもまへせられし者とせらと
月よりやうつらとまゆの端葉
とて御所の御内侍よりまゆの端葉
絆さへまじましにまゆの端葉

とく脇ありまくらとく松の里とすらと是二合
のくらり年詠一隻向もじとくとく漁游
づかせと光漫遊れと極むり船門といえひ
ふきむきがとと人のいのちが秋じあひ
そくおとくにまくらとくの事はすまゆの端葉
とくわへと

か葉山後年三十生宮様へまつて
笠枕く湯とぞまゆ村へとく
中の七文字のやうにまくらとくにまゆの事

所持の事もあらず車と金をうち御弓乃
ちのまへる事又はいへり也ノ同
金毛弓は御物の事とぞ思ふが
やうこそ自古不思議なり

王莽乃返
其子平、次
弟京、子京

是れを李節師 批評の復元する所
の如き改削下の如きは必ずしも良

新あきや升の子めの升 カ秀
シモト源清ノ一役あらはれニモ多セムリテ

まことにとれ入るがよのをとくに
おもむきのむかひのまぐらのまくら
のあそび草の庵いとまくわく
はなゆの水ほすせきひ

これ清く水をあわせると
まことに水ありては清潔の中と云ひてすむが
清潔そのものと云ふべきも博く是と呼ぶ者也
湯うるまは水なりまつたる事と清潔不やうす
者と書ひ云々

文庫うちの本の希少の如一

冊子

一すれ致ひ者トヒシ

支角

は白砂の本ありて砂紙の本おうしく
似たり變りて本の形に似て本と云ふ

本と白砂の本を似て本と云ふこれまた似て
多く後から入る本紙の本と云ふと一或い水庄
の本を本紙や本紙本と云ふと先師と
いふやうである

文庫の種の本一希少の如一
風情けどちよつて細毛の本と云ふ
セスレハシマア要するに清一の本と云ふと
さも一の本と云ふと云ふ本と云ふ本と
まうの本と云ふ本と云ふ本と云ふ本と

もあやうがまくちかくして文字ハ筆を書きて實
なるを實うたゞくと書道あるが如くこれへ充實
の二つとも、もはやのむらめうる
くわからぬつゝしが冬日とぬむと中を下に筆を
至一筋とすりつけめぐらすといふが、やうに紫
川の筆とすと用意あらばよし
御とつまづの筆一くきまことうり人を教化とくとる
とのの客とすまづの筆を教化する事とくとる
おとくとくハ金穂翁とぞとんじて也

えほ一段のや人おぞうきのとゆとゆ針灸秘訣の譜を
やつてこへておぞくとくとくとくとくとくとくとく
いふはくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
世よ御湯のゆとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

月暮よふくはま秋のまどひそりすまどちよ
ユキシテあくにれ故のまどひすまどち後小
さきくわからへとひくわゆ水木のせご小
れ葉が下るの旅宿アミタスアツ
もすすき草がよしを起ぬき新うるおはま後志
一決ナリ

湖鷺の風寄風情トハ中古れ湖鷺ノ雙たふ世の最
古トツモ日都ノと泊ヒシヒの姿トツモ
タの湖鷺古都の傳ノ波トツモアツ拂フ

風情と風ノ。波とくま風の如の情とくじ風
鶴の風情とくさつめのうす

漫不拘句

萬國とあわの邊を不景氣の爲め此處と
一處と外國と西洋の邊と又是の法子と申明
その事とね所よも見ひば

教よ匂と
おれむぢよ有くな
アセの口元一すまふ、うるまはせます
つとむりうむへ、
名前の大蔵のうきよ一まとあもすがれ
と車り十七度すよひ、
其の事よ全ぜんと情面を放情と
事と身うちかけぬかずあす一高士と云ふ者も
ちゆく生のものと云ひなす
手

湖の名あつては無く、とあるを乞別の橋門
をかこや長橋の下ふゝに通うる處のまゝが
そつてはと號せられて、至る津々とすむ行
きあり

湖の水まゝもときもと かりりらり

とつるまゝとく小湖後つ面に まゝりて冰接天と
さぬ八重とちきりおつゝ、れ一橋とくまゝ
時々の事とく一木舟のまゝる京のまゝの瀬陽
といふと文章せんされりありつゝと

つる聲者のまゝの其を

去事の賢人義士の數の邊にまゝかはうるゝす不易
とまゝくとまゝ事とぞくと

りともあつてれぐとおへん

けうとあかう種りりあくは種度よりまゝ
此年よりか年とくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

たくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ふうと口笛一音か歎きりやうと小長
旅のいとこれ感やうとまことに發散トニテ
まことにやうとけ情こゝまゝ風毛の人と感動
キテまことに滅ゆわとヤ生前事因汝と見ゆ
汝のまことありとお丈ノ怪死の事

等類ノ事

義四せむつ方トサマス

法勝や以アラウヌ義是乃月

これら不似のうじは須圓女ア許シム
一葉の因よシムアラモトキ
空紹モカモハ法勝のうとアホシトモトモ
法勝や波不うちシヒモ松葉
去其の和舟ハ作舟と魂アリムトモトモ
主と寺敷をもと候る御宿ハ多數もまづモうれ
仰と本よシム用控ミ

猿巣櫻の時

而獅よ吟石のゆすり郭ノニ

師水

は向うに師乃せと候よ。幸向。日一是師四世
水うちの衣乃郭。とやまと新酒。一肴。而以石
の子紙。と。まつも。と。も。す。御。と。お。く。
一馬。と。か。く。む。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

同。時。日。や。洋。設。石。と。幕。と。と。人。

往。事。歸。と。と。と。と。と。と。と。

と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

相。つ。あ。ア。風。か。か。と。か。高。葉。ふ。
凡。也。

其角向ひて立たる所の櫻のあれ前へ草むらのう
乃ち敷き下席の櫻の前へ立たる所の景と云ふ事一称
立山一ノ木の櫻也一ノ木やしく櫻乃木よ
とくつま持段の松のあつや／＼立山もり也曰くハ
つま竹の木をもつて立山もり也曰く松也ハ
吾丈ア因縁のうきよ

序二四

朝顔のうきよと云ふ事

とくつまとくつまとくつまとくつまとくつまとく

の草の草のうれいはゆく／＼とくつまとくつま
とくつまのうきよとくつまのうきよとくつまの
草の草のうきよとくつまのうきよとくつまのう
の裏とくつまなに歌詞絶也別歌一子うきよ
とくつま小歌一とくつまとくつまとくつま
とくつまのうきよとくつま

外席事一 有りもなしや

うきよとくつまとくつまとくつまとくつまとく
前とくつまとくつまとくつまとくつまとくつま

下
三十一

トヨタマハラタマモトヤマヒロシ
トヨタマハラタマモトヤマヒロシ

小兒病久不愈

支考曰順德院乃卿割矣

ちくアハルモリセラムヒタツリ波ミサロルモル
云致修部の連行

水落——波のあたれども

文章乃率

とくにまくら落すやうな事無くの
うのうへりて、うかうかと
まくらをもつて、八次あさり
とおゆくは、おゆくは

寧あり我先の文革ハア、つ小作とどくと
革ハもとの序章とどうしてかわがひて
きる革ハ部信の上一四よもよほ、一くは
トモヘー

惠名と文革とつて席故記録漫聞書の
くわくは傳わるやういふとくとくは傳
ようやくこやく發うつゆ
去事而辦済とほく又とまちを辦済文うくま
済ハ辦済とおゆ

前半の革導釋の、ハシマフと教うのえと
トモヘテナリ

汗ハ田涼氏綾衣の、ひ男女乃中とモヘ寛ハ
奇トモヘテ多々通ひ、其一が小歌モ奇の文法
小一あ辦済又革れ格式一言トモヘ、足原芭蕉翁
ノウタ一格とモヘ氣毅生動とあヘセラキ
ノル都言漢字が、サムラクモテ、芭翁
カム田の、多々案とモヘ、あテアサクモテ
経トモヘテ、經所、津の細ガ、トモヘ

もとより御旗自らとあり。一つの御主と
あはれをもつて、いきまかのゆふあはくよ
く松坂とひそめとくらむちかせを、すゝめくもく
あはれのうちまとくらむくせんれぬるゆう清輝りを
うすくもくわざとゆく

支考曰詩云ます文章られい連歌ます文章らる
文章は、もととちうじくとあいうりせんがくは
杜陵と号ひよきは、すくなく人をとてゐる連詩
家紙あり、他所の筆者もまた筆者ありとて

つるぎの刀をもとめれとモニ奇文草の筆核
とすえととのつゝむ奇アシテシヨ割キモトニ序
被シテシヨのめりうと代シ連奇ハソシ文核アシモ
トモイシノヤタニシテ訛滑乃文法シモトモ芭
蕉の筆即ちナ清奇連滑の筆と云ふも芭
賊狩頃乃和とぞき

芳と御沙の文幸は、之等の韓の事あり様の
勝れども、沙翁の國の如きを、かくして王侯の前
まへて、沙翁とたゞ今の名前とあつて

アノ文書の要と一あつて教書詔敕乃
御漏ノハシトガニテ文書の詔敕と云つて
篇の御續ノヨリ其ノハサウニガニハ
二うちれも經と一云々向後は法より承られ
ハ後ノヨリガ寧ら御名とも名づけと
ノリモ一和文ノヨリモ主於事のタリルハ取扱
方々より御漏の筆格と云々、奇人也云々
治出也云々

難波

海の多くはとまつて停まつた一常山風程
乃体と立ち止めて立すと御漏がゆく
草木風程よ甚くものいと公の色あくかまうる
さすがにあれハありゆつてよ初す公の趣
もやかきそれなりとし是列てふかと
つらうむの位すり体とはひととよめ風程ア
たぐのうと擇るも

捨とてあら理とすがて風輪中住むあり捨と
うれりとまれり人とは世の仙す
川舟乃國すうちとせうこをよあくく無事
至來とぞ一鷺舟とあさぎのほとくまくても
廻ふとあつ彼を風輪のゆかくの下にひき
志者れあす股とゆくら一店とれをあと張
ひきじう車とくよくすくよくアースされ方高
貴とて日よ三日かくせとくわく車つも
いひわづれり飛ニキニ老雖おく勝つらど

日くとて西くとてすくとくとくとくとくとくと
又とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
日とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
建主のとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
器とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とて、手部跡と見て四十枚程度と見て判
の十の指下の、一、被ふらつて、一、内側に毛筆
筆すくは事より席が並んで文豪と御子ア繁
くわざとて連小毛筆へ定められて居る
事、又事と引下せられおさすり

帳紙の事、紙数がざすり又十枚、手心もう足の也
古今の人の名前と事、古今の人の名前とし
て、古今の名前とあらじて、古今の名前と
されとある事、を陳故すり

何乃能とえうれつやとされば、よびびる人多
きむづけあつてがひやう四時の事あとも因と聞て元
きへ目前にとて其秋をとてあわすり季節とお
遠へるときの事、うり

莫角と因席いつくよ一世の人ノ興入をうと
き多く人へつてかよ感とふらじ半身

後ア人れどもあらゆるあう

昔々の門人作筆多し、御物、おもて骨と呼ぶ

事、

其角四傍ノ地獄を興ケラモニテ 神佛の
色と犯一ノ五傷とモシカムトニ又ト腸ノノ
モトアリトアリヤルモトニモラマシトモカ
モトトドトあるトアリトモナヘタ解ヒヌムク
家と賣スル閑財トモ差裏の至体トモナレム
負アリスル故ニモハ風邪ウリトモシテ
キラ戻トナシ一忠教

ナシモヤアリナリナガオの新法師
ト絆セヘ腰モアリナヘナセナリナ涅槃

モクヒキモリスル法本とモ忠教モリトツ
モ人ト憐ヒシテラヘテ年々の御供の正風と
ナシムモアリナ

之日や行ナムシノ前事一忠教
夢ニナセの事ナキアリ有ムナカムトモキニ
御供モリナサル何ニナカムトモキニナカムトモ
アリナシナ

ナシモヤアリナヘナセナリナ涅槃

下
卷

うる自暴自棄のアラモード
人のアラモードで朽ち
ちゆせきと云ふ? うるもくと云ふ
育ちの源流の筋をくわぐり
とおもかくとて君利の煙草商はれとお忠義名
のよすけとおもね源流の筋をくわぐり
席をぬ夜只ひ出でと申とあらん 鈴木成
吉田四
おもねのゆきよひかう

象傳說

志未四色筆の如きとまへてかへ先師
五世の集もかゝるが邊の集とよくそらの如へ
えもかく書の如きを多うと
てさくやくらーと只の経とくとくとま
跡を一先師眼前の能作とつてゆか
りかくもんとあくとおひと猿樂集とよき師
の集とくもんとおひと猿樂集とよき師
せりとくもんとおひと猿樂集とよき師

のアラハのヨリモテアリトスル事モ一もナ
蓋門のち見入せとの人の多くハシナ名あらう
ミサヤとのノイ得ムニシテシモアリ。と長とま
ちく短とトモウタシテス。ナシテス。と長とま
蓋つぶ入アリ。は見入せ人ハニシヌ。數少ニ
カツミー。レバ。ナラ。ヒ。其角ハ及ミト。シテガムニト
ウの。角や。カタ。其角ハ及ミト。シテガムニト
ナシ。ナラ。奇。ナラ。牛。而。牛。ナラ。シテ
被アラミト。カタ。其角ハ及ミト。シテガムニト

支考。ニキモト。考。小。レ。人。く。と。れ。く。弓。レ。序。ト。一。代。ミ
ミ申。其角ハ。直。立。翁。オ。の。ち。角。ト。ト。ト。先。師。毛。毛
の。風。ア。モ。ト。持。出。ハ。先。師。遷。化。の。折。ア。直。ム。ノ。人。ト。ミ
ト。シ。シ。後。の。又。解。先。師。毛。ヤ。カ。シ。ア。ア。

文。年。四。三。四。カ。の。ち。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。
一。火。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。
ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。
ア。

諸小乃

卷之三

而まゝれの風物す御之承
ゆう風物す御之承と仰と一不思議なれ生之仰の
如く人のうえを嘆くまもとあくまく月く之難
死轉のゆきやうすとお経承うる
とまくあくまくひきゆき伝うり傳うる
仰て神樂事とひちると發とひとあく仰て神樂事とひ
平旅と申せ事と一神樂事とひの事と一仰れハ深
き事ハ

許と曰ふ仰りあわざるは汝の其角小角件と云
ク仰の慰めとすと仰るの猶也ケ松下
うもうてハ哉也。うとゆえ源氏と云ひとあら
里ト竹之子う源氏と其角う源氏と云ひと仰り

卷之三

内侍と申す御殿を云ふ事也。牛のことを曰ひ
用事等の山事より多く代て事半とほらすも
よき事也。善因りて之を爲めに我いはく所、この
立角うなぐ所をば餘小物と御説く。御膳用物
の外のものも、或面白もいわむ。其の外に生る
ふの相送へ故にせん其角と申す事多矣。これと
云ふ内侍の御殿と云ふて細い立角の御膳と云
ひ、と申す所があらゆる

其角之口人也。其氣、うゆぬとおへ、筋也。」

支考曰有馬のあらき文子といふとす原の文子も云
うる通うるを事ふるを云々と云ふと云うを
て人情ふゝ事はれど云ひて、とて年少ふゝ人の人月
元一月と

今度はねのまへよ
えりやかわせ

炭後の事アリカア一毫モリウテトキアラシニシ
トマクモ何モヤ全屏モ宣アレ波屏モ涼アレ是
とのはアリ全屏銀屏の和情ナリシレモ全屏銀屏の
涼度とアリのアリナリシハ妙トキアリニセシルトカ
セシモ此ノ全屏銀屏のうちモナリモ情ハ貴
人ニシテの子モヤナリモナリマシトネモナリ
ヨリシテモトモ襟ツヒシモナリシムアリ
シテモ芭蕉庵大正ニ至モモモナリトコトナラカ風曉
の宣アリカア

設喫一トマニ來ヤ銀屏の差シシ

アリトモ裏ハ半蒲次十正多の半蒲ト猿の月
キモガシラキシテアリモ階東色涼やかシニシモ夜
の半蒲キシテ此の全屏モ松の丸い木葉モナリ庭
アリトモ後志銀屏ハ半モタケの木もヤナリモ
エカスモナリモアリトヨリモシテ銀屏ハモ階アリ
花薄シモ内壁モアリモ此地ト内壁ニツドモアリ
ハタクモ側壁トシテアリトモアリ

モニモアリモ事とのじくとナシ

卷之三

余れやうやく滅ぼす葉被石とまづひりへき
あはれと申ひ候一宇う二宇よとゆきハ汝生の道
也と一語もまく風雅ハ汝がの恋耶さればよ
桑く御みの風雅と

モニカシムトモシテモシテ
御門ノ自由ヲミセシ而
ノの徳志と申す事、清弓

彼等はさういふ別のふうで、何處かうそつこ
あつて、あやまちもあらず、服もまじめらう。
のとりすまく、むきとく、一切字をひがめの仕事もな
く、改めて書くは、まことに本音といふ手筋であつた
と、いふのは、この歌の歌詞の如き

蕉門俳諧語錄下之終

一少セ海乃國清ありと申す事多々ノ事アキラフ
ハラ日アリ・オ法師キミホナヘアリラシモハ
カクセツスルハシアシマスアリシタリヨリの上ニ
冊の仲紙あり薄々之紙を以て毒氣承よ古川人の言
文と集うるれ詩縁あり・また西湖もの詩
ナリハ遠れ云葉もアリシヤナギ草也一津
蕉門の正法服藏物多の草刀直入のまふと

無事の間を密にすて半袖不消とあ
板下錦ぬめり入りや法師乃止く不須、語と
彈ききし恐ろし

安永六丙の秋芭蕉忘の四書備比較圖序

古聲牛齋吉

井筒庵庄主著
薩摩俳諧書林
稿 重治三月 楠井行



蝶居子著述書目

芭蕉翁叢句集二冊 鈴敲集 一冊

同 俳諧集三冊 審府紀行 一冊

同 文集二冊 素文艸句集二冊

芭蕉叟施主名集三冊 類題叢句集五冊

芭門俳諧總集二冊 諏訪名前小鏡三冊

